

隨泉寺寺報

平成 25 年 (2013 年) 2 月号 第 510 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

涅槃会

■涅槃 ～お釈迦さまの入滅された日～

2 月には涅槃会があります。涅槃会というのは、お釈迦さまが入滅された日を御縁として勤められる法要のことです。お釈迦さまは、29 歳で出家され、35 歳で悟りを開かれ、以来 45 年間、み教えを説かれ、80 歳で入滅されました。日本では 2 月 15 日を入滅の日としています。入滅とは、滅度に入ることということでお釈迦さまが亡くなられたとは言わないで入滅とか涅槃に入られたと言います。

それでは、滅度とは何かといいますと、涅槃と同じ意味で、インドの古い言葉の「ニルヴァーナ」の発音に漢字を当てはめたものです。元の意味は、火を吹き消すということだそう
です。つまり、煩惱の火を吹き消した状態を涅槃といい、仏様の悟りの境地のことを言います。それを中国語に訳したのが滅度ということ
です。



そうしますと煩惱をなくすことが、仏になるということになります。親鸞聖人は「阿弥陀如来さまは、私たちのことを煩惱具足だからこそ、必ず救うと誓われました」とお示しく下さいました。その誓いが力となって現れて下さったのが、名号です。つまり、私たちの煩惱が救いのさまたげにならない力強い如来になりました、ということが南無阿弥陀仏ということになるのです。だからこそ、「煩惱を断ずることなく涅槃を得る」と親鸞聖人はお正信偈にうたわれたのです。

2 月の法座予定

- 2 月 2 日 …………… 本部役員会
- 2 月 10 日 …………… 掃除 長者原東
- 2 月 18 日午後 1 時より …………… ビハーラ安芸結成 20 周年 (広島 院)
- 3 月 2 日午後 5 時より …………… 門信徒会本部役員会

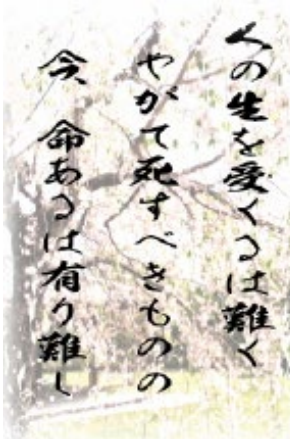
☆ ビハーラ安芸結成 20 周年記念大会

ビハーラ安芸が結成 20 周年を迎えました。

『ビハーラ』という言葉は、「精舎・僧院」「身心の安らぎ・くつろぎ」「休息の場所」を意味しています。「精舎・僧院」というのは一にいわゆる「寺院」のことで、お寺は「身心の安らぎの場所」を意味していました。

つまり仏教の教えは、生・老・病・死の苦悩を課題とし、身心の安らぎをもたらすものでした。しかし、時代の流れの中で仏教と医療や介護といった社会福祉はそれぞれ専門分野化し、各分野の関わりが薄れてきました。

特に仏教・僧侶の活動はお葬式が多くなり、仏教＝死というイメージが強く、病院の中で僧侶の姿を見かけることはまずありえないというのが現在の状況です。そのような中で、仏教がもともと課題としてきた、老・病・死の苦悩に応えるため、医療・介護といった社会福祉の各分野とも連携しようという活動が生まれます。それが「ビハーラ活動」と呼ばれるものです。



浄土真宗本願寺派では 1987 年からビハーラ活動が展開され、医療の分野だけでなく、介護の分野も含めた社会福祉領域などにも活動の範囲を広げてきました。

現在では全国各地にビハーラ活動の団体が組織作られ、病院や高齢者施設などで様々な活動がなされています。

広島でビハーラの組織が結成されて 20 年になります。私も第 2 代会長として関わらせていただきました。このたび記念大会を開催するに当たり、今抱えている今日的課題を《創作劇》の中で考えてみようと思ひました。

《創作劇のシナリオ》

ガン末期の患者が、残された日々をいかに生きるのか、支えるか？

* 第 1 部 患者の気持ちを察し、どう援助するか、支えるか、

* 第 2 部 亡くなった時に葬式はいかにあるべきか、

* 第 3 部 愛する人をなくした喪失体験をどう超えていくか、

創作劇をしてみんなで考えてみたいと思います。誘い合わせて、皆さん参加してください。ちなみに、シナリオは住職が書きました。出演もしています。

笑いに来てください。

☆御礼

永代経懇志 金 参拾萬円 祭木 正康殿 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 祭木 正康殿 特 寄付

本願寺第24代門主 大谷光真様が、本願寺に念仏奉仕団で、参詣された方々にお話された御法話が、本になりましたので、毎月少しずつ転載いたします。

「再びはら 一度きりの尊き道を いま歩いている」 (榎本栄一)

人生について、さまざまの考え方がありますが、大ざっぱに分けてみると、一つには、将来のことを楽しみにして、現在、努力したり、我慢したりするということがあります。

山に木を植える、農業を営むのもそうですし、受験勉強や習い事もそういう があります。しかし、行き過ぎると、当てにならない将来を当てにして裏切られたり、我慢するだけで、むなしく終わってしまうことにもなりかねません。

反対に、今さえよければ、今さえ楽しければよい、先のことは考えないというの があります。一部の若い人に見られる気になるところですが、現代の風潮であり、政府の姿勢にもそんな不安を感じます。

親鸞聖人のみ教えをいただく私たちはどのように考えればよいのでしょうか。一つには、今を大切にすることです。恵まれたひと時、ひと時を精一杯生きる。それは、阿弥陀如来さまが、いつも、支えていてくださり、喚んでいて下さるからです。それと共に、将来に向かって力強く歩む。それは、往生成仏の道だからです。御同朋御同行と互いに手を取って歩んでいきましょう。

大谷光真

☆いのちの長さに思う

先月福山のおじが亡くなりました。覚えておられる方もあると思いますが、7年ぐらい前、皆さんと一緒に研修旅行でお参りした備後赤坂の西明寺の前住職です。フェイジョアという 物の苗をさして、皆さんに下さった方です。年は84歳でした。

そのおじが、腎臓を悪くして、人工透析をしなければならないことになりました。するとおじは、「もう人工透析はしなくていい。今のまま、自然に任せて生きていく。十分に生きさせてもらった。ありがたい人生であった。」と断固として延命治療を固辞したそうです。周りの家族や、先生方も、人工透析をすれば、あと何年かは生きられるのだからと勧めたそうですが、おじはことわりました。そして発病してから、わずか1ヶ月足らずでお浄土に還っていきました。



おじは15年ぐらい前に、いここに住職を譲って、それから毎日畑の野菜づくりや、庭の苗木の世話を楽しんでいました。

入院中は縁のある人がこられる度に、「ありがとう、ありがとう。あなたに出会えてよかった。」「楽しい、ありがたい人生だった。阿弥陀様に遇えてよかった」と口癖のように言っていたそうです。

人生は長さではありません。いかに生きたかということになるのでしょうか。

2011年7月22日「クローズアップ現在 ヒューマンドキュメンタリー ある少女の選択—18歳“いのち”のメール」(NHK総合テレビ)で、幼い頃から重い病気に苦しみながらも、最先端の医療に支えられいのちをつないできた18歳の田嶋華子さんのことが紹介されました。



彼女は「いのちは長さじゃないよ。どう生きるかだよ」と言い、2011年9月になくなりました。華子さんは、幼い頃に心臓移植を受け、十年以上が過ぎた18歳のある日、腎不全となり血液透析をしなければ生きられない状況になりました。

華子さんは今の厳しい病状について医師からすべてを聞き、透析をしなければ生きられないことを知らされた上で、「自分らしく生きる道」つまり、これ以上延命治療をせず、大好きな我が家で両親とこれまで 普通に生きることを選びました。全身の浮腫や呼吸困難で苦しそうな娘の様子を目の当たりにした父親は、主治医に透析治療を依頼しました。主治医は今後の治療方針については、華子さんの意思を尊重すべきと判断し、両親、主治医、華子さんで話し合うことになりました。その中で、華子さんは、父親の「週三回の透析治療を受けてほしい」という思いを受けて、

●華子さん「もう十分生きてきたし、自分で決めたことだし、もうパパ追いつめないで。……パパ、私の身体が変わっていくのが辛いんだね。でも私は納得しているんだよ。私は本当に幸せなんだよ。私はふつうの18歳の経験ができなかった、でも誰にも負けないパパとママに出会えて幸せだった」華子さんが自分の運命を受け入れ、その上で自分らしく生きることに意味を見出し決断しました。



その数週間後、家で父親の腕に抱かれ息を引き取り、その最期は穏やかな表情でした。(中略)華子さんは次のようなメッセージを両親に残していた。「神様が私にいろいろな病気を与えてくれたことを私は恨んでいない。(病気を)与えてくれたからたくさんいろいろな人と会えたもの」と語っていました。